

野生のメダカは、昔は大変馴染み深い淡水魚であった。しかし近年の里地・里山の水路のコンクリート化、農薬の使用などによる種々の環境の悪化により激減した。

それにもない、野生のメダカは1999年には環境省のレッドデータブックにおいて絶滅の危険が増大している種（絶滅危惧Ⅱ類）にランクされている。

しかし、野生のミナミメダカの突然変異種であるヒメダカは観賞用に広く飼育されていることもあり、野生種は激減したにもかかわらず皮肉なことに「メダカ」という名称は日本人には今も親し

まれている。

診療所の庭の地下水が流れる小川に「メダカの学校」を造ることは私の長年の夢であった。

そこで、最近逝去された行きつけの親しい理髪店のご主人が、愛

「医」の中の蛙

北村 豊

小の町小布施らしく、複式学級の「メダカの分校」といったところだが、来年には小川に生徒数が増えることを切に願っている。

昨年は、ミナミメダカ以外にも近くの川などから採集してきたカ

情を込めて飼育しておられた小布施産の野生のミナミメダカの末裔を奥様より少し分けていただき、当院の新居の小川に昨秋放流した。

まだ「生徒数」が少なく、現在は長野県最

ワニナも放流したので、将来はゲンジボタルなどの水生ホタルが棲み着いて美しい冷光を放って飛び交ってくれるのが夢となっている。

ところで、皆さんは全てのホタルが卵・幼

虫時代を水中で生活する「水生ホタル」であると誤認識していないだろうか？実は2千種以上いるとされる世界のホタルの大部分は、

陸で孵化して陸生貝などを食して陸で育って成虫となる「陸生ホタル」であり、「水生ホタル」は日本から東南アジアなどにかけてわずか10種くらいしか存在していない極めて希少な種類なのである。

このような「木を見て森を見ず」の現象は専門性の高い医科・歯科界、さらには政界でもよく見られる。親や祖父が医師、歯科医師で、親から子への職業的継承性が高いことには親の明示、非明示的

な期待の影響が明白である（鹿内2007）との研究もある。

世の中には多数の職種とその選択の自由性がありながら、競馬のプリンカー（遮眼帯）と同様の視野制限を受けながら進路の選択を実行させることは、本人のみならず医療界や凋落しつつある日本にとっても不幸なことである。大学時代から長年狭い世界を歩むことの多い医師や歯科医師には「医」の中の蛙大海に歩みだす2021年になることを願っている。

（上高井郡小布施町・信州口腔外科インプラントセンター）